

# 文化

## かがくの対話

### 第1部 生命科学

②

京都大人文科学研究所助教

加藤 和人氏



かとう・かずと 1 961年京都市生まれ。京都大卒、理学博士。2001年に京大ニケーション・現代科人文科学研究所助教。04年から京大生命科学研究科助教を併任。専門は科学コミュニケーション。現代科

二〇〇三年四月、ヒトゲノムの解説宣言が出された。それから二年が過ぎ、二時ほどの騒ぎはなくなつた。今こそ、冷静に生命科学について議論する時期に来ているのではないか。

ヒトゲノム計画の目的は、代表的なヒトの遺伝子配列を解説することだったが、今では、さらに進んで、世界中の人々が提供した多種のヒトゲノムを解説している。どこが違うのか、どの違いが病気になるやすかつたりないのか、また薬が効きやすいのか、効きにくいのかを調べ、医学に役立てる試みだ。将来には、一人一人に合わせた

## 切り離せない人間との関係

2005年(平成17年)3月4日 金曜日

こんなにも自分に増えるのか、自分を保ちつつ、違う個体をつくっていく。実に興味深い。牛や犬、マウスなど百種以上の生物についてゲノムが解説され、研究が進められている。まさにゲノムを通した新しい生物学の時代が訪れている。ヒトゲノムの解説が一つの象徴であるように、人間の最大の特徴に、知的能力を使い、周囲を理解しようとする営みがある。ほかの生物よりもはるかに精密に周囲を理解し、理解した事柄を同胞と共有し、さらに理解していく。そして、自分たちがより快適に暮らせるように努力してき

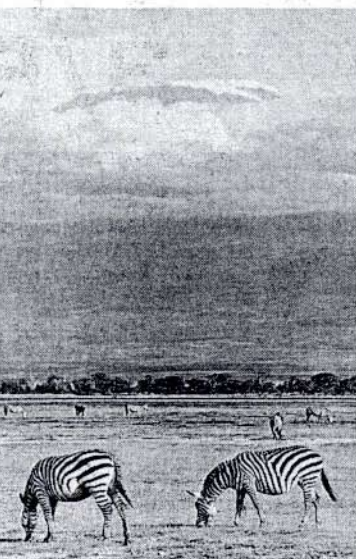
た。これこそが人類が誕生してから続く歴史だ。自然について理解しようと言つのは、実は人間の宿命とも言える。現代人は、生命科学が高度に進んだ環境に暮らしている。歴史の中でも特殊な時代にいると思いたい。しかし、もしもしたら、ダーウィンが進化論を発表した十九世紀よりも、ヒトゲノム解説宣

言の衝撃は小さいのかもし

だと思つ。百の夢のうち一つは、社会が大きく変化する。政治や経済と同じように、科学の営みは人類社会の中で重要な営みの一つだ。世界がどうなっていくかを考えようとする。その一が重要な意味を持つことがある。現状について知ることが、そのことが積み重なるとしても必要になる。

大人を含めた一般市民と現場の研究者が直接に意見を交わす機会がもっと増えなければよいのではない。経済や政治を語ると同じように、科学を語る社会となることが望まれているのではないだろうか。

(談)



生命をはくむ地球の大地—ヒトをはじめ、あらゆる生物にはゲノムがある

ヒトゲノム解説 日本、米国、英国、フランス、ドイツ、中国の六カ国でつくる国際研究チームがヒトゲノムについて一九九一年から解説に着手、DNAデオキシリボ核酸の二重らせん構造発見から五十年目となる二〇〇三年四月、ヒトゲノムの解説宣言が出された。

人間と科学は切り離せないもので、社会を考えると、世界を考えると、科学を考えると、